

# タンロン城王宮跡出土の陶磁器

ハノイ大学 グエン・ティ・ラン・アイン

長崎大学 野上 建紀

## Ceramic found in Thang Long Imperial Citadel

Nguyen Thi Lan Anh (Hanoi University)

Takenori Nogami (Nagasaki University)

### Abstract

For its age-old historical and cultural values, being the center of regional political power for almost 13 centuries without interruption and diversified relic systems, Thang Long Imperial Citadel was recognized as a world cultural heritage site by the UNESCO World Heritage Committee on 1st August, 2010. Remains of the Imperial Citadel were discovered on the site of the former Ba Dinh Hall when the structure was torn down in 2008 to make way for a new parliament building. Various archaeological remains unearthed were brought to the National Museum to be exhibited. Thus far only a small fraction of Thang Long has been excavated. Archaeological site at 18 Hoang Dieu is about 87 meters from Kinh Thien palace. It houses vestiges of palaces of the Ly, Tran and Le dynasties. The lowest layer of the site was found a part of the eastern area of Dai La citadel under Cao Bien's reign of the Tang dynasty. The higher layers were reserved for palaces of the Ly and Tran dynasties and a part of the center of the eastern palace of the Ly dynasty. The top layer revealed a part of the centre of Hanoi Citadel in the 19th century. History revealed that Thang Long imperial citadel changed a lot but its centre, especially Tu Cam Thanh, remained nearly unchanged. Here, archaeologists dug out many important architectural vestiges and a great deal of porcelain and ceramic wares used in the imperial citadel through various stages of development. The findings paved the way for researchers to study ceramics made in Thang Long in general and ceramic wares used in Thang Long Imperial Citadel through different dynasties.

**Key Words:** Thang Long Imperial Citadel, 18 Hoang Dieu, porcelain, ceramic wares, archaeologist

## はじめに

タンロン遺跡は2010年8月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。2002年夏、国会議事堂（バーディン会堂）の立て替え工事の際、7～19世紀にわたる多数の建築遺構が折り重なって発見された。中国支配時代のダイラー城（7～9世紀）、独立後のタンロン城（10～18世紀）、ハノイ城（19世紀）の遺跡が含まれていると考えられる。2002年から2004年、2008年から2009年にかけて、王宮地区の発掘で陶磁器がたくさん出土しており、本研究では当時王宮でどのような陶磁器が使用されていたのか、その種類や産地を調べていきたい。

### 1. タンロン城王宮跡について

世界文化遺産であるベトナムのタンロン城王宮跡の中心はハノイ旧古城圏と18ホアンジエウ（HOANG DIEU）通りにある。遺跡群は多くの考古遺跡とハノイ旧古城圏に残っている旗竿（COT CO）、北門（CUA BAC）、ドアン門（DOAN MON）、キンティエン宮殿など（DIEN KINH THIEN）を含む。この遺跡群はバーディン区にあり、ベトナムの国会議事堂に隣接している。タンロン城王宮跡はベトナムの民族の文化の特徴を有するだけでなく、世界において特別な価値を有する（図1）。

タンロン城王宮はハノイの旧称で長い歴史があるところである。タンロンは1010年から1804年までベトナム諸王朝が都を置いたため、各時代の遺跡が重なっているのが特徴であ

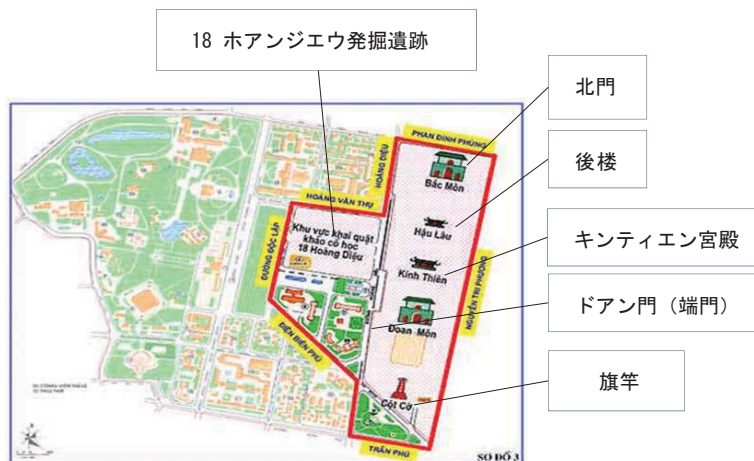


図1：タンロン城王宮跡（引用 「タンロン城王宮保存センター」に加筆）

る。最初は中国の唐が9世紀末に築いたダイラー城壁 (DAI LA) の土台を基礎としてタンロン城は築かれ、その後歴代王朝により何度も再建された。リー王朝 (LY・李朝) は1010年から1225年まで続き、後にチャン朝 (TRAN・陳朝)、レ朝 (LE・黎朝)、マック朝 (MAC・莫朝)、レ中興期 (LE TRUNG HUNG・黎中興) と続く。その後はグエン王朝 (NGUYEN・阮朝) に政権が移り、場所もフエへと移転した (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016 : 18)。

もうすこし詳しく歴史をみると、1009年にリー・コンウアン (LY CONG UAN) が王になり、リー王朝を創始し、リー・タイトー (Ly Thai To・李太祖)<sup>(注1)</sup> と呼ばれた。1010年、首都をニンビン省 (NINH BINH) のホアルウ (HOA LU) から交通の要衝である元安南都護府のダイラー城に移った。首都を移した後、タンロン城を建設した。タンロンの建築は3つのラウンドで建てられた。一番大きなラウンドはダイラー城或いはキンタンと呼ばれ、ホン川 (SONG HONG)、トーリック川 (TO LICH) とキンギュ川 (KIM NGUU) の3つの川に囲まれている。タンロンと命名したことについては、有名な伝説が残っている。リー・タイトーの船団がこの地に近づいた時、黄金の龍が現れ、天高く飛び立った。龍は王の象徴であり、タンロンがいつまでも栄えるようにとの願いがこめられている。皇帝はこれを吉兆として遷都し、タンロンと名付けた。タンロンというのは龍が昇るつまり昇龍と言う意味である。

ダイラー城は当時の住民たちが住んでいたところである。次の城のラウンドの皇城は行政機関と官僚の住むところで、中央のラウンドは紫禁城 (TU CAM THANH) と呼ばれて、皇帝と家族が住むところである (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016 : 18)。李朝の後、陳朝、黎朝にタンロン城はさらに拡大したが、1516年から1788年の間にベトナムで内戦が起こって、タンロン城は大きく破壊された。1527年に武将の莫朝が権力を奪ったのをきっかけに、長期の内乱の時期に突入、一転してベトナム史で最も混乱した時代となった。17世紀には武将の鄭氏 (TRINH) と阮氏が対立し、北部の鄭氏、南部の阮氏が争って長期の内乱状態に陥った。この鄭阮二百年戦争はベトナム南北戦争などともいわれる。1789年に、阮朝のクアンチュン (QUANG TRUNG) は首都をフエに移し、タンロンは北城という名前と呼ばれた。阮朝から遷都するにあたって、重要な建築物は分解されて運ばれ、フエで再度組み立てられたのである (Vũ Duy Mên, 2017 : 20)。阮朝期、タンロンはハノイ (河内) と改名、ハノイは一地方都市として扱われ、フランスの建築風のハノイ城が建てられたが、規模は縮小された。そして1884~86年には、フランス植民地政府によっ

て、部分的に破壊されてしまったのである。現在、タンロン城王宮跡の地表には幾つかの遺構が残る。

### 北門—CUA BAC

北門は阮朝時代にフランス人の技術者の援助を受け、旧ハノイ城の皇城を囲む城壁に造られた門である。当時のハノイ城塞には五つの城門が存在していたが、現在残っている唯一のものである。横幅17.08mで高さ8.71m、奥行き2.48mである。幅15~16m、深さ5mの堀を渡り、「正北門」と書かれた門をくぐると、中にはいくつかの建物がある。政治・経済を司る役所、軍の駐屯所、旗竿、そして監獄もある。北門はフランス戦争で正面左側の上下二箇所フランス軍によって撃ち込まれた砲弾の痕がある。また、北門の上には、フランス戦争で捕まらないように自殺した二人のハノイ城の総督グエン・チー・フォン（NGUYEN TRI PHUONG）、ホアンジエウ（HOANG DIEU）の礼拝堂がある。戦争で部分的に破壊されたのであるが、現在一部分を改築して公開している（写真1）。



写真1：北門（筆者撮影）

### キンティエン宮殿—DIEN KINH THIEN

キンティエン宮殿は1428年にレー・タイトーによって李朝や陳朝期の宮殿の基礎の上に建てられた。皇帝とその家族の生活の場所で、謁見や儀式なども執り行われた。現在、キ



写真2：キンティエン宮殿（筆者撮影）

ンティエン宮殿の建物は壊れ、宮殿に続く龍の階段だけが残されている。龍の階段は1467年に造られたものであり、現在4匹の龍が残されている（写真2）。

### 後楼—HAU LAU

キンティエン宮殿の後ろに位置するため、後楼と呼ばれる。後楼は19世紀の阮朝時代、皇帝が都のフエからハノイを訪れ、キンティエン宮殿に宿泊した時、随行してきた側室や女官達が皇帝のお世話をするために控える場所とされていた。建物は三階建てで、屋根には龍の頭の装飾がある（写真3）。



写真3：後楼（<http://www.hoangthanhthanglong.vn> より）

### ドアン門—DOAN MON

ドアン門は元々、後黎朝前期の15世紀に建てられ、阮朝時代に補修された。皇帝一族の住居があった宮城の南側に、ただ一つ開かれたのがこのドアン門である。門には五つの出入り口があり、その両脇には更に、楼閣へ上るための階段がある。中央の一番大きな入り口は皇帝用で、五つの出入り口のどこから入っても、必ず中央の検問を通らなければならない構造になっている。当時、キンティエン宮殿へ通じた門であったため、通過する人は厳しい検査を受けていた（写真4）。



写真4：ドアン門（<http://www.hoangthanhthanglong.vn> より）

## D67の家

D67の家には地上会議室がある。当時、ベトナム共産党の政治部中央軍事委員会は、抗米戦争の戦略に関する決定を含む重要な会議をこの地上会議室で開催した。特に1974年12月18日から1975年1月8日まで、南部解放に関する議決を行い、1975年のベトナム全土統一を導いた。そして、D67の家は入口の前に左右から地下に下りる階段があり、地下には会議室と機材などが置かれた小さい部屋がある。ハノイ城がベトナム軍の所有になってから、当時のソ連の援助で造られた。扉は鉄製で、地下室は原爆にも耐えられると言われている（写真5・6）。



写真5：D67の家 - 地上会議室（筆者撮影）



写真6：地下会議室（筆者撮影）

## 旗竿—COT CO

軍事博物館内にある旗竿は全体の高さ33.4m、三重の正方形の台の部分と18.2mの塔からなっている。旗竿は1812年に阮朝のザーロン（GIA LONG）帝<sup>(注2)</sup>によってハノイ城内に監視塔として建てられた。1940年代には、日本軍がバクニン省と連絡を取るために電報局として使っていたこともある。現在、ハノイのシンボルとなっている（写真7）。

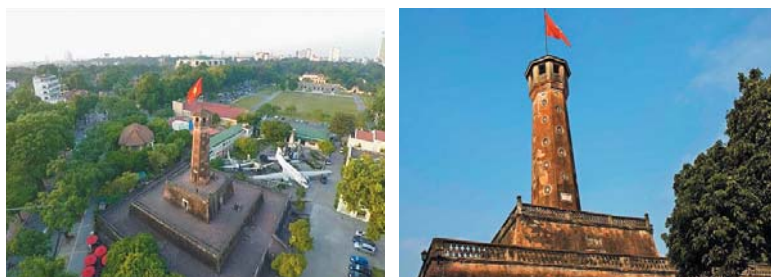


写真7：旗竿（<http://www.hoangthanhthanglong.vn> より）

## 2. タンロン城王宮跡で出土した遺物

1998年、ドアン門や北門を研究中に、考古学者が李王朝と陳王朝時代の遺跡と遺物を発見した。そして、2002年の冬から2004年の夏にかけて、18ホアンジエウ通りが発掘され、タンロン以前(11世紀以前)、タンロン時代、ハノイ時代の遺跡や遺物が発見された。1300年前から各時代の遺跡が重なっているのが確認されている。遺構を分析した結果、ダイラー（7-9世紀）、前黎（10世紀）、李朝（1010-1225）、陳朝（1225-1400）と黎朝（1428-1789）の各時代の遺構の存在が明らかになった。多くの遺跡と遺物が良好な状態で残っており、多くの歴史学者や考古学者が「地下にタンロン-ハノイがある」と述べたほどである。そして、2008年3月から2009年9月にかけて、さらに遺構や遺物が発見された。建築物の床が48件、井戸が8件、排水設備が11件、川跡が8件と墓が62件などである（Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016：18）。その中で李朝の建築物は規模も大きく、技術も高かった。建築部材とその破片、生活用の陶磁器、木製品、鉄製品などの遺物が大量に出土した。本稿では出土した建築用の陶磁器瓦、生活用品である陶磁器を中心に述べていきたい。

### 建築用の陶磁器瓦

タンロン以前のダイラー時代から黎朝にかけての建設用の瓦・レンガは、龍、鳳凰、蓮、クワ葉の形のデザインが主である。屋根飾りの陶磁器瓦や床のレンガなどは、各時代によってデザインが少し異なるが、主に仏教と関わりをもつものである。ここでベトナムと仏教との関わりを少し述べておく。仏教は、2世紀にインドから伝来し、4,5世紀以降には普及し、当時のベトナムの生活への影響も大きかった（Nguyen Lang, 1992：17）。さらに10

世紀に北部ベトナムが中国の支配を脱すると、仏教は国教として重んじられた。ハノイの北東に位置する現バクニン省一帯は当時の一大仏教センターだった名残を今に留めている。ベトナム最古の阿弥陀座像があるファッティック寺 (PHAT TICH) もその一つである。特に李朝時代には多くの寺や塔が建てられている。さらに李朝に続く陳朝まで合わせた400年余という長い年月は、ベトナムが初めて国造りを模索していた時代であり、中央政権の力が必ずしも強固でなかったこの時代であるからこそ、仏教が多くの面で主導的な役割を果たした黄金時代だったと言われる。そのため、この時代の歴代皇帝の多くは、敬虔な仏教徒であった。しかし、黎朝になると朝廷では儒教が主導権を握り、仏教は国教から村落宗教へと後退していった。その後、15世紀までにベトナムの仏教は道教、儒教との混合を



図2：屋根飾り陶磁器瓦：龍形・蓮形（ダイラー7-9世紀）  
(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図3：龍と菩提樹の屋根飾り陶磁器瓦（11-12世紀） (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図4：蓮文（13-14世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図5：鶯の装飾（13-14世紀）





図6：屋根飾り龍（15－16世紀）



図7：透し龍の装飾（15－16世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

強めていったのである。建築資材としての陶磁器瓦は、こうしたベトナムと仏教の関わりを示すものでもある。

例えば、ダイラー時代には龍、獅子や蓮の模様が主に屋根飾りとして利用されていた。一般の建物ではなく、城や宮殿を飾るためのものである（図2～7）。

タンロン城の装飾は、鴛・鳳凰、特に龍と菩提樹に特徴がある。破片と建築様式の分析結果から、城や宮殿の最上部は、龍と菩提樹の瓦で飾られていたことが分かった。言うまでもなく、菩提樹は仏教のシンボルであり、伝説では釈迦が苦行により衰弱した体を尼連禪河の流れで浄め、村の娘スジャータから乳糜の供養を受けて元気を回復し、ブツダガヤで悟りを開いた時に座った木とされる。

李朝の王は幼い頃僧侶の養子であり、熱心な仏教徒であったので、李朝の城や宮殿の建築にも仏教のイメージが見られる。当時の建築の主な彫刻は雲、水、蓮、菊、菩提樹、龍などがある。インドでは蛇（ナーガ）の神は仏教の守護神となっており、それが龍の姿になってベトナムに伝わったので、ベトナムの仏教寺院の天上画にはよく龍が描かれている。また、李朝にとって、龍は王朝の権力だけでなく、水源も表す。同じ龍でも李朝の龍は蛇と龍を合わせた動物であるため、陳朝など他の時代より姿が小さかった。また、ベトナム民族の起源伝説では、ベトナム人が「竜子仙孫」と伝わっており、龍はベトナムにとって特別なものである。

陳朝の出土陶磁器瓦はほとんど李朝と同じ模様と形であるが、14世紀になると、城の周辺でも鳳凰、蓮の装飾瓦が使用されている（Bui Minh Tri, 2011b : 19-63）（図8・写真8）。遺物からみる限り、陳朝になっても李朝の建物をそのまま利用していたと考えられる。しかし、黎朝時代の城は元朝が新城を建築する時にほとんど壊されたため、遺構はあまり残っていない。

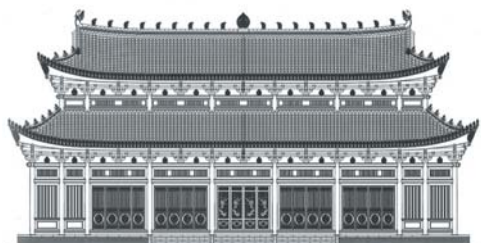


図8：出土した遺物と遺構にもとづく城の復元想像図      写真8：発掘現場（筆者撮影）  
(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành (2016))

### 日常生活で使用された陶磁器

9世紀のダイラー時代から黎朝まで生活用の陶磁器や金属製の道具など多様な遺物が出土した。ベトナムの陶磁器だけではなく、中国の陶磁器も数多く出土している（図10）。前111年から938年にかけてベトナムは北属期で、中国王朝による支配期である。中国王朝の制度や文物がベトナムに輸入され、現地の人間の漢化、北ベトナムに移住した漢人の土着化が進行したと考えられる。9世紀は安南都護府<sup>(注3)</sup>下であったため、中国の青灰釉の陶磁器が多く出土する一方、中国の統治下においてもベトナム土着の文化は生き残り、ベトナムの陶磁器も出土している。中国の陶磁器は種類が様々であるが、代表的ものは碗、皿、壺、酒瓶であり、特に多かったのは酒瓶である。出土した皿は内面と高台内には窯道具であるハマの目跡がみられる（Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016：64）。この時代の製品は、全面に釉をかけるのではなく、ほとんどの製品の高台には釉薬をかけられていない。出土した製品は、酒瓶の数が多く、種類も様々であった（図13・14）。ベトナムではさまざまな行事で酒は欠かせないものの一つである。行事の目的や規模によって、酒

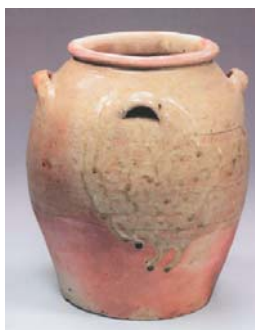


図9：鉄釉壺（ダイラー8－9世紀）      図10：青灰釉壺（中国）  
(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図11：鉄釉鉢（ベトナム・8－9世紀）



図12：青灰釉皿（中国・8－9世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図13：青灰釉酒瓶・中国



図14：青灰釉壺・中国

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

の種類が異なり、瓶も異なってくる。また、王宮での職業によっても違う瓶を利用する。

文献史料によれば、前111年には中国の薬用植物の加工方法を学び、ベトナムでもよく使用された（図11）。薬草を作るための摺鉢が出土しており、ダイラー時代には薬用植物の使用が行われていたことが明らかになった。

また、李朝の陶磁器と推定されるものは種類が豊富であった。白濁釉・青釉・コバルト釉・鉄釉を中心とした陶磁器である（Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016：166）。李朝時代になると、陶磁器はダイラー時代と違い、形もデザインも向上しており、高級品と評価される。発見された陶磁器はタンロン城内の窯で焼かれ、ほとんど王族が使用していたものと推測される（図15・16）。

蓮をモチーフにした陶磁器も多い。仏教では蓮は水中に自生し、葉は円形で水に浮いており、夏に淡紅色や白色の花を咲かせる植物である。釈迦の台座としても有名であり、泥水が濃ければ濃いほど大きな花を咲かすことでも知られている。また、当時、蓮台が王宮で装飾品として、最も尊いところに置かれた。また、姫の化粧品を保管するためのものとも言われる。蓮台には王朝の権力を表す龍の姿がある。李朝代には建築用のレンガだけではなく、装飾品にも蓮や龍の姿が見られ、仏教が盛んになったことを示している。



図15：龍飾り蓮台・龍飾り蓮台の蓋  
(ベトナム・11-12世紀) (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

図16：青釉瓶 (李朝)

そして、陳朝時代の陶磁器については、李朝時代と同じようにタンロン城内の窯で焼かれた白濁釉・青釉・コバルト釉・鉄釉製品などが確認されている。出土した製品のほとんどは、生活用の酒瓶、鉢、碗、皿などであり、様々な種類がある。釉薬や文様は李朝時代の製品と似ているが (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016 : 190)、これまでになかった染付の製品が登場し、当時の生活用の製品がさらに豊富になったと考えられる。

ベトナムでは李朝時代から陶磁器や鉄製のオイルランプがよく生産されたが、詳しい情報が記された史料はあまりなかった。発掘現場では、オイルランプを乗せる皿が出土したため (図17)、8世紀にはオイルランプが出現した証拠になる。また、陶磁器の容器蓋 (図18)、陶磁器の洗面鉢 (図19) もあり、当時の陶磁器の製品は高級品であり、庶民が使用したものではないと考えられる。

さらに15世紀に入り、陶磁器の生産窯が盛んになると、製品の種類も多様になっていった。染付以外に色絵も生産されるようになり、国内向けだけではなく、海外への輸出もあった。1999-2000年にチャム島沖で沈んだ船で発見されたものと同じものもある。出土した陶磁器は皿、碗、小坏、鉢、箱、仏像などあり、文様は鳳凰・龍・動物・人間・ベトナム



図17 オイルランプを乗せる皿 (陳朝代)

図18 菊文容器の蓋

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図19：花文洗面鉢（13 - 14世紀）



図20：染付菊花文皿（14世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

生活の風景などを題材としている。タンロン城の発掘現場から出土した16世紀のものと推定される陶磁器の中には、タンロン城内の生産窯だけではなく、バッチャン産の陶磁器やハイズオン（Hai Duong）産の陶磁器も見られるようになる（Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2015a : 95）。

考古学研究者によると、タンロン城遺跡から出土した陶磁器片を分析した結果、城内生産窯以外のハノイ周辺にある生産窯の製品も含まれると判断された。当時、ハノイ周辺で焼かれた陶磁器は模様とデザインが城内で焼かれたものに似ているが、品質的には城内のものが良質である。五本爪の龍は当時、王朝のシンボルであった。そのため、王は龍の模様の製品を使用し、王妃は鳳凰・花・葉・波文など描かれた製品を使用した（図22・23）。白濁釉・染付・色絵などの製品は前時代に比べて、技術が高いと評価されている。また、それまでにはなかった製品が登場した。まず線書きと濃みで龍の形だけを描き、一度、焼成してから龍の爪など体の部分を細かく描き、本焼きを行い、本焼き後に白い素地に黄色の文様が描かれ、さらに金彩が焼き付けられた。釉や色絵と金と組み合わせた碗は高級な製品であり、王が使用する碗として生産されたと考えられる。

王と王妃が使用する製品以外に、王宮内で官僚、官人、官女らが使用する陶磁器もみら



図21 龍頭文注ぎ口（15世紀）

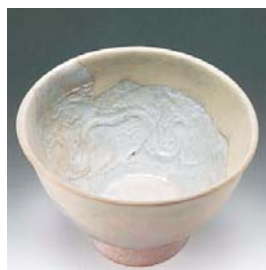


図22 五本爪龍文碗（15世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図23 染付五本爪龍文皿（15世紀）



図24 菊花文皿（15世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

れる。出土した主な製品は酒瓶や酒用の碗などである。文献史料には王宮内での宴会の礼儀などについての記述は多いが、宴会で使用された食器については詳しい情報がなかった。発掘現場から出土した陶磁器は、当時どんな宴会を行っていたかを推測する手がかりとなる。

食器だけではなく、キンマの道具入れなどの道具も出土している。檳榔子<sup>(註4)</sup>を噛むことはアジアの広い地域で行われ、ベトナムでも愛好された。『大越史記全書』にはレ・タイン・トン王が1473年に指示として、「官僚が宮殿に入るとき、入り口周辺に噛み残った



図25 染付牡丹文酒瓶（15世紀）



図26 染付背景文酒コップ（15世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図27 染付梅花文鉢（15世紀）



図28 染付釣人鳥大皿（15世紀）

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

繊維質を吐き出してはいけない」(Ngô Sĩ Liên, 2011 : 458) と書かれているので官僚、官人、官女がよく嚙んだものを考えられる。道具入れには漆製品や陶磁器などがみられるが、当時のタンロン城では陶磁器の道具入れに人気があったようである。出土したキンマ道具には様々な陶磁器があり、工夫を凝らしたものが多かった。



図29 石灰壺 (14世紀)

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)



図30 壺 (15世紀)

石灰壺 (図29) には白濁釉をかけられ、竹形の把手が付いている。檳榔子を嚙み終わった後に繊維質を吐き出すための専用の壺 (図30) もある。檳榔子は、貴賤を問わず、広く服用され、日常性が高かったが、上流階級では漆製品や高級な陶磁器のものを使用した。

### 陶磁器の交流

東西の文化圏を結ぶ交通路に位置するタンロンは東南アジア圏内だけではなく、遠方の中近東まで、早い時期から文化経済交流を行っていた (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016 : 124)。発掘現場から出土した陶磁器は中国産のほかに、中近東産のものも発見されたので、中近東と経済交流があったことがわかる。

発見された陶磁器は7世紀から19世紀までのベトナム陶磁器の他、7世紀から19世紀ま



図31 イスラームの青釉壺・皿 (9世紀)

(Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)

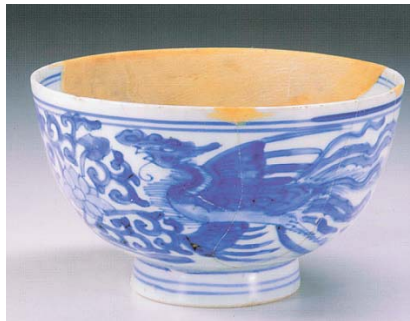


図32 中国 (Trung tâm nghiên cứu Kinh thành, 2016)  
(左) 酒瓶 (9世紀) (右) 染付鳳凰文碗 (17 - 18世紀)

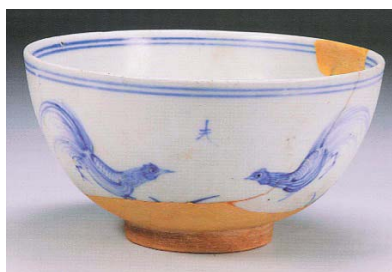


図33 染付け山水文碗 (17世紀)

図34 染付け双鶏文碗 (17世紀)

(Bùi Minh Trí, 2011b)

での中国陶磁器 (図32)、9世紀から10世紀の西アジア陶磁器 (図31)、14世紀の韓国陶磁器や17世紀の日本陶磁器 (図33・34) も数多く発見された。経済交流があった証拠とみることができる。タンロン城遺跡で発見された日本陶磁器は、肥前の染付と色絵が多い。2006年から2009年までに出土した日本の磁器は、鉢・皿・碗・小瓶などがあつたが、特に鉢と皿が最も多かつた (Bui Minh Trí, 2011b : 31)。一方、タンロンの陶磁器は、ホイアン (ベトナム)、パندان島 (フィリピン)、インドネシア、日本、西アジアなどでも発見されているので、15世紀から17世紀、タンロンは政治的な都であつただけではなく、経済的な中心拠点であつたと考えられる。タンロン城内の生産窯は、タンロン王宮内で使用するものだけでなく、輸出向けの製品も生産したと考えられる。

#### タンロン朝廷により管理された“官窯”

発掘が行われる以前は、タンロン城内でどのような食器を使われたか、明らかではなかつた。2002年の発掘調査で初めて9世紀から19世紀の陶磁器が出土し、ベトナムの陶磁器が明らかになった。完成品の破片だけでなく、生産過程で失敗した14世紀以前の茶碗、皿、



瓶、瓶蓋、蓮台やハマなどの窯道具が出土したので、タンロン城内に生産窯が存在したことがわかった (Bùi Minh Trí, 2008 : 150)。李朝や陳朝の文献史料には、城内に金・宝石・武器・陶磁器を製作するバックタック (CUC BACH TAC・百作所) があったことが記されている。各地方の優秀な工芸職人が集まり、王宮の生活用品を生産していた。当時、王宮向けの陶磁器を作る生産窯と庶民向けの使用品を区別するために、城内の生産窯が“官窯”と呼ばれ、城内で生産された製品には“長樂宮”や“官”文字を入れていた。それらの文字は王宮で使うことを示すものである。考古学研究者は、陶磁器の年代を分析し、“官窯”が李朝時代からあったことを証明している。

また、当時“御用”の製品は城内の生産窯だけではなく、ハノイ周辺の生産窯でも焼かれた。近年、ハイズオン省チュウダウ村 (CHU DAU)・ハノイ郊外キムラン村 (KIM LAN) の発掘で発見された陶磁器のほとんどは白磁であり、中央に“官”文字が入るものがあり、城内向けの製品を生産した“官窯”が存在したと考えられる。それらの意匠や文字はタンロン城内の“官窯”で焼かれた製品と同様であるが、品質はタンロン陶磁器ほど良くなかった。タンロン陶磁器は薄くて軽いことが特徴で、高い技術によるものであった。

チュウダウ陶磁器の生産は14世紀から17世紀頃まで盛んに行われた。15世紀の製品としては、トルコのイスタンブールのトプカプサライ宮殿の博物館が所蔵する高さ54センチのベトナム製の花瓶が知られている。その花瓶には13の漢字が書かれてあり、ナムサック (ハイズオン省) に住むブイティヒが1450年にこの瓶に絵付けを行ったことを表している。その後、戦争などの理由で中断し、1980年頃にチュウダウの陶磁器生産が復活した。2003年にベトナム科学者は、中部クアンナム省の沖合いにあるクー・ラオ・チャム島の付近に沈没した船からチュウダウ陶磁器およそ40万点を引き揚げた。それらは海外輸出向けの製品とみられ、チュウダウではタンロン城向け、庶民向け、輸出向けなど各種の製品を生産したと推定される。

また、チュウダウのほか、キムランでも陶磁器が生産されていた。発掘調査によると、8～9世紀頃にはキムラン村のある場所には人が居住していたことがわかり、キムラン村に桑の栽培を教えたという記述も史料に残されている。キムランでは獣面や建物の装飾品など、他の一般の農村では作られないようなものが出土し、現在の技術でも難しいとされるコバルトと鉄を共に使って絵付けされた陶磁器もキムラン村から発見されている。また、朝廷が管理していたことを示す“官窯”の文字が記された皿などが出土しており、この村に朝廷により管理された工房があったことが推測される。最も出土品が多いのは13～14世

紀の陳朝期の製品で、その頃活発に生産されていたことが窺われる。15世紀初めに黎利が明（中国）を撃退した時、キムラン村はバッチャン村などと共に黎利軍の拠点となっているが、16～17世紀頃から長い間、陶磁器産業が途絶える時期を迎え、青銅鑄造を行っている。そして、19世紀初めには養蚕業を生業としたが、20世紀になり、1950年頃バッチャンに窯業合作社が作られ、キムラン村からも工員が集められた。キムラン村は、1980年の生産自由化後、陶磁器を生産販売するようになり、長い間途絶えていた窯業がキムラン村に復活したのである。

現在、タンロンで使用された陶磁器は、タンロン城内の窯だけでなく、ハノイ周辺の“官窯”でも焼かれていた。それらの窯は、朝廷向けの製品以外にもベトナム製品の海外輸出にも大きな貢献を果たしていたことを発掘調査の結果が示している。

## おわりに

ホアルウからダイラーに移動する前に、李太祖の「遷都詔」には「空と大地の真ん中にあり」、「南北東西の真ん中の位置にあり」、「川と山の近くにある土地」であると述べた。当時、タンロン城の王宮は、権力の中核であると同時にベトナムの民族の文化、歴史遺産が集中する場所であった。また、タンロン城王宮は、紅河川、トーリック川とキンギュ川の3つの川に囲まれており、紅河デルタの中心であるため、ベトナム人の灌漑稲作文明の発祥地となり、紅河川を通る国内外の交通の要衝であった。発掘調査で大規模な様々な宮殿が発見され、連綿と続く歴史遺産が残されていることがわかった。李朝時代の11世紀から黎朝時代の18世紀までの約800年間、タンロン城王宮は長らくベトナムの政治・行政の中心であったので、タンロンは多くの海外諸国と交流を継続的に行ってきた。その交流の歴史は、発掘調査で出土した西アジア、中国、日本、朝鮮などの遺物が示している。狭い範囲の中にこれほど長期間にわたる各時代の王宮などの遺構が重なって残っているのは、世界の中でも類まれなものであろう。

本研究は、JSPS 科研費 JP17F17304の助成を受けたものである。

なお、本文は、著者らが2018年8月に行ったベトナム・ハノイでの現地調査にもとづく報告である。グエンが主に執筆し、野上が日本語の校正を行った。

## 脚注

- (注1) リー・コンウアンは974年にバクニン省のコーファップ（古法）村に生まれ、幼い頃僧侶の養子に迎えられた。僧侶ヴァンハイン（万行）に師事し、仏教を学んだ。そのことが官吏のみならず、僧侶たちからも推薦を受けることになったのである。これにより李朝歴代の王は一貫して仏教に帰依し、僧侶を重用することになる。
- (注2) ベトナム語でゲン・フック・アイン（阮福映・1762-1820）で、ベトナムの阮朝の創始者でザーロンの称号をもつ。ザーロン帝は初代皇帝として即位し、国号・越南国を命名し、国政を行った。
- (注3) 唐の六都護府の一つ。北部ベトナムのハノイに置かれた。9世紀には南詔に占領され、さらにベトナムに大越国が成立して滅んだ。なお、遣唐使として唐にわたり、日本に帰れず、唐朝に使えた阿倍仲麻呂は、この安南都護として赴任した（後に安南節度使となる）。
- (注4) 檳榔子を細く切ったもの、あるいはすり潰したものを、キンマの葉にくるみ、少量の石灰と一緒に噛む。場合によってはタバコを混ぜることもある。しばらく噛んでいると、アルカロイドを含む種子の成分と石灰、唾液の混ざった鮮やかな赤や黄色い汁が口中に溜まる。この赤い唾液は飲み込むと胃を痛める原因になるので吐き出すのが一般的である。

## 参考文献

1. Bùi Minh Trí (2008), Thử bàn về đồ gốm ngũ dụng trong hoàng cung Thăng Long, Nhận diện giá trị khu di tích Hoàng thành Thăng Long sau 5 năm nghiên cứu so sánh (2004-2008) – Kỷ yếu hội thảo khoa học Quốc tế, Hà Nội  
(Bui Minh Tri (2008) “2004Minh にかけてタンロン城の地位についての検討 - 王と王后が使う陶磁器を中心に -”)
2. Bùi Minh Trí (2011) “Gốm Nhật Bản trong Hoàng cung Thăng Long, NXB Khoa học Xã hội  
(Bui Minh Tri (2011) “タンロン城における日本陶磁器, 社会科学出版社)
3. Nguyễn Lang (1992) “Việt Nam Phật giáo sử luận, in lần thứ 3, Nxb Văn hóa, Hà Nội  
(Nguyen Lang (1992), “ベトナム仏教史論”, ハノイ文化出版社)
4. Ngô Sĩ Liên (2011) “Đại Việt sử ký toàn thư”, NXB Khoa học xã hội, tập 2  
(Ngo Si Lien (2011) 『大越史記全書』第2号, ベトナム社会科学出版社)
5. Trung tâm nghiên cứu Kinh thành (2015) “*Bulletin of science*”, Viện Hàn lâm Khoa học Xã hội Việt Nam  
(インペリア研究所 (2015) 『*Bulletin of science*』ベトナム社会科学院)
6. Trung tâm nghiên cứu Kinh thành (2016) “*Những khám phá Khảo cổ học dưới lòng đất Nhà Quốc hội*”, Viện Hàn lâm Khoa học Xã hội Việt Nam  
(インペリア研究所 (2016) 『国会議事堂地下での発見』ベトナム社会科学院)
7. Vũ Duy Mên (chủ biên) (2017) “*Lịch sử Việt Nam*”, NXB Khoa học Xã hội  
(Vu Duy Men (監修) (2017) 『ベトナム歴史』社会科学出版社)